




ねらい

- ・戦時総動員の徹底と矛盾を理解することができる。
- ・様々な資料（証言）と、戦争に関わる話し合いを通して、戦争の悲惨さを捉えることができる。

	授業の展開（☆予想される生徒たちの発言）	留意点（●主な発問）
導入 7'	<p>1. 前時までの復習をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「[[証言記録 市民たちの戦争] ぼくたちは兵器を作った ~大阪砲兵工廠(しょう)~」の「アジア最大の軍需工場と言われた、大阪砲兵工廠」(0:00~3:17)を視聴する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・軍需優先の戦争経済体制下、国民の大量の兵力動員が行われていたことを動画で確認する。 ・アジア最大と言われた大阪砲兵工廠（軍需工場）が戦局の悪化で様変わりしていくことを本時で学習することを確認する。
展開 ① 15'	<p>2. 次の4つの法令や運動が国民の生活に与えた影響について考える。（国民精神総動員運動、国家総動員法、切符制・配給制、国民徴用令）</p> <ul style="list-style-type: none"> ☆国民の思想統制がされています。 ☆労働力・物資の統制がされています。 ☆欲しいものが買えない、物がないです。 ☆軍需産業に動員されています。  <p>大阪砲兵工廠内部</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●太平洋戦争終わりまで国民に対してどのような法令や政策が出されましたか。 ・教科書の資料をもとに特に国民精神総動員運動、国家総動員法、切符制・配給制、国民徴用令、学徒動員・勤労動員、学童疎開などをジグソー法で確認する。 ●特に4つの法令や運動は国民にどのような影響を与えましたか。 ・戦争に向けて国民がまとまるための運動であることを理解する。 ・戦争が長引き、労働力・物資が不足したため、議会の承認なしに生活必需品を統制したり、国民を軍需産業に動員させたりしたことを確認する。
展開 ② 25'	<p>3. 学徒動員の問題点を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「学徒動員と、各家庭からの供出」「体調を壊しても、敵前逃亡は認めない」(9:27~14:08)を視聴する。 ☆低賃金での重労働 ☆学力低下 ☆体調不良  <p>学徒動員</p> <p>4. 戦時総動員の矛盾を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「空襲直後の砲兵工廠の様子」(18:00~19:11) 「工場で働いた若者たちのその後」(22:30~24:59)を視聴する。 →なぜ多くの国民はこれらの法令や運動に従ったのかについてグループで話し合う。 ☆国民の思想統制がなされ、国のためにと意識に自然となった。 ☆メディアの規制で正しい情報を得ることができなかった。 ☆戦争に勝つと思っていた。日本は神国だから負けることはない信じて疑わなかった。 ☆日本中の多くの人が同じように思っていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・視聴後に学徒出陣も紹介する。 ・兵力不足を補うために、それまで徴兵猶予が認められていた大学や高等専門学校の学生・生徒を陸海軍に入隊させ、戦地に送り出したことに触れる。 ●学徒動員がはじまって、学生にどのような変化が起こったのでしょうか。 ・報酬、義務、権利については、常に問題があり、平和な社会でも議論が多いこと、災害発生リスクや軍需工場の空襲で命を落とす場合もあることを理解する。 ●体調を壊しても敵前逃亡をしなかった（できなかった）理由は何でしょうか。 ●大阪工場は敗戦前日まで稼働していた。このとき労働力も原材料も不足していたにも関わらず、学生たちはどうして兵器を作り続けたのでしょうか。 ・戦争が進むと国民（老若男女）すべてが戦争に加担する総力体制が整えられた背景を理解する。 ・戦争を遂行するために実施された動員の実態を学び、その動員により労働力不足等の矛盾が生じ、国民生活が圧迫されると国民の間に厭戦気分が広がったことなどについて考える。
まとめ 3'	<p>5. 国民（生活含む）と戦争の関係を考える。</p>  <p>大阪城公園に残る 大阪砲兵工廠化学分析所跡</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・国民と戦争の関係について「自分が考えたこと」をまとめる。 ・まとめを各自で発表し、共有化を図る。 ※第二次世界大戦では国民生活が圧迫され、戦争に疑問を持つ者も出てきた。未曾有の被害を生み出した要因について個人個人で考えることで、改めて平和の大切さと今後どのように行動していけばよいかを考える。